

第3回門真市魅力ある教育づくり審議会

(第2回つながりのある教育の創造部会) 議事録

開催日時 平成29年2月17日(金) 午後2時40分

開催場所 市役所本館2階 大会議室

出席者 佐久間敦史、小林美鈴、横貫照国、国吉孝、齋藤耕司

事務局 満永学校教育部長、山口学校教育部次長、三村学校教育課長、高山学校教育課参事、黒木教育総務課課長補佐、松岡教育総務課副参事

傍聴者 2名

議事

佐久間部会長

「つながりのある教育の創造部会」を開催させていただきます。

それでは、まず事務局から今回の部会での議題について説明をお願いします。

案件1. 「小中一貫教育の推進」について

事務局(三村学校教育課長)

お手元の「門真市教育振興基本計画」の24ページをご覧ください。こちらには本市での小中一貫教育の取組状況と課題が書いてあります。その課題の解決を図るために9年間の系統的な教育課程や組織体制について検討し、一定の方向性を定めていこうとしております。

続きまして、資料3「門真市魅力ある教育づくり審議会 今後の流れ(案)」をご覧ください。今回の部会では、子どもの発達段階を考慮した教育内容・教育課程について議論をしていただきたいと思いますと考えています。

そのための討議の柱としまして、まず「①小中のギャップとは何か」を議論していただき、次に「②小中の円滑な接続のために重要なことは何か」を議論していただいたうえで、最後に具体的な方法として「③思春期の入り口となる5年生以降の教育内容や形態についてどのような形が望ましいか」を議論していただきたいと思いますと考えております。

この内容を基として、自由に議論していただきたいと考えています。

また議論していただくお時間ですが、大変申し訳ありませんが、16時を目処にさせていただき、残り10分で意見の集約をお願いしたいと考えております。

佐久間部会長

ありがとうございました。

それでは、お一人ずつご意見を伺ってから相互に議論を深めてというのを繰り返していきたいなと思っています。

一つ目は小中のギャップとは何かとなっています。

もう少し事務局から説明があるとうれしいのですけれども。

事務局（三村学校教育課長）

すいません、そしたら本日資料4「中央教育審議会答申の抜粋」というを出していただけますでしょうか。

先ほど、全体の中で説明させていただきましたが、一貫教育というのかなり長いこと研究をされているものであります。27年度に先ほどの説明もありました義務教育学校というものが制度化され、具体的な形も変わってきた中ですが、資料4のP226をご覧ください。全体会では全部説明は申し上げられなかったのですが、ここに小中一貫教育の今まで行ってきた中での成果というかたちで出ております。

カラー版でないので分かりにくいところではありますけれども、単純にグラフが横に伸びているものが、一定効果が認められているものです。その中の真ん中より少し上の方ですね。22%と67%というのをついた。いわゆる中一ギャップが緩和されたという文言がここに入っております。

現行の小学校制度、中学校制度でいくと6年間を小学校で過ごし、そこから学校が変わると、中学校というところに行く。6年間学んできた小学校から中学校に進学するということは1つのいい区切りになるともよく言われております。ただこの大きな変化になかなか子どもたちが戸惑いついていけず、もしくは中学に入る時点で校区というか、他の学校からも来る子どもがいるとなると、人間関係の難しさの中で、例えば具体的にいいますと不登校気味になったりとか、いじめの事案が起こったりとか、もしくは全く学習意欲等を失い学力が落ちていく退学傾向になっていくと、いわゆる非行みtainな形にもなりうるような課題がかつてから挙げられております。これがいわゆる中一ギャップと言われる。他にもたくさん要因はありますけれども、こういうものがあります。

思春期も丁度この時に当たってきて、今は若干、若年化されて小学校の高学年という話もありますけれども、そこも大きな要素としてかんできて、さまざま

ま問題が起こってきたというのが中一ギャップです。一貫教育をやる中で、この部分が緩和されたという数字で具体的にここにも挙がっております。これが1つの成果というかメリットではないかと。当然先ほど説明申し上げました義務教育学校の中でも、この分の緩和というものは見られるという意見もたくさんございます。以上が中一ギャップの説明となります。よろしいでしょうか。

佐久間部会長

ありがとうございます。非常に分かりやすい説明でした。それでは、それぞれのお立場で今ご説明をいただいた中一ギャップを中心とした小中のギャップについて、知っておられることや子育ての中で感じられたこと等を含めまして少しご意見をいただければなと思います。では今回も国吉委員から順番に回っていきたいと思います。よろしいでしょうか。ではよろしく願いいたします。

国吉副部会長

国吉です。今現在1つ思いついたことがありますので、そこから話をさせていただきます。

まず、小学校と中学校の大きな違いは学級担任が全てを任されている、これが小学校の特徴だと思います。それに対して中学校の場合は学級担任はいるけれども、自分の教える教科とそのクラスの経営運営が任せられている。というところに大きな違いがあると思います。

言葉を変えますと小学校では学級担任制。中学校では教科担任制という形なっています。この点が小学校から中学校へ進学した場合にかなり子どもたちが戸惑いを持つ大きな違いだと思います。その中で、先ほど学校教育課長から説明がありましたけれども、例えば勉強面でなかなかついていけなくてしんどくなる。それが原因で例えば退学あるいはイジメの要因になったり、あるいは不登校になったり、そういうものが生じて来るかと思われまます。

またこの中で大きな違いといいますとテストについても大きな違いがあるかと思えます。小学校の場合には各單元ごとにテストを行います。つまりは確認テストという形のテストだと思います。学期の終わりには大きなまとめのテスト等もありますけれども、それに対しまして中学校では大きな定期テストが、例えば1学期でいいますと中間テスト期末テストや2学期もそうですね、中間テスト、期末テストで3月期なりますと学年末テストという大きなテストがあります。それ以外にも実力テスト、最近はチャレンジテストもあります。こういったところが大きな違いになってくると思います。

あと思い出しましたら追加していきたいです。今思いついた2点を申し上げます。以上です。

佐久間部会長

ありがとうございます。ご質問とかありましたらあとでまとめてみましょうか。聞きなれない言葉とか、もしあればですけども、後でお願いいたします。

続いて齋藤委員もよろしいでしょうか。

齋藤委員

国吉委員がおっしゃった学級担任制度と教科担任制という違いが一番大きな違いではないかなと感じております。それ以外であればいくつも出てくるかなと思います。例えばクラブ活動であったり、これは必ず入らなければいけないという訳ではないですけど、多くの生徒が入るクラブ活動の中で、先輩後輩という関係性が出てきたり、門真市の小学校では制服はありませんが、制服の着用が義務づけられたりします。授業時間も45分から50分になる。しかも学習内容がかなり高度化されていくので小学校で生活していたリズムとは大きく異なるところで、とまどいを感じる子どもたちが多いのではないかなという感じがしております。

佐久間部会長

ありがとうございます。主に今学校の中でということでご説明をいただきました。では横貫委員よろしく願いいたします。

横貫委員

小中一貫ということですが、なぜ一緒にしなければならないか分からないんです。根本的なことなんです。一緒にしないといけないことなんでしょうか。一緒にすると先生ももの凄く大変なことになるんじゃないかなということしか思わないです。あと中一ギャップというのが緩和されたということですけど、当たり前じゃないかなと思ったりするんですけど。前回も言いましたが、失敗させる方がいいと思いますので、環境に適應するようにするにはいるのではないかと思ったりするんですけど、逆に小中一貫になった時のメリットというのも、どういう方がいいのか、今が駄目というわけではないのですが、やらないといけない意味がもう一つよく分からないというのがあります。

理容師をしていますので、お客さんで小学生や中学生がきますが、中学生だと一気に生意気になるんで小学生だったらやっぱかわいいなっていう感じはありますね。5年生ぐらいからだんだんそんな感じになってきます。我々も小学生料金とか中学生料金とかに変えるのですが、なんで分けるのかなと今ふと思いました。小中一貫教育の意味がもう一つ分からないと思いました。

佐久間部会長

横貫さんから見て小中のギャップはあると思いますか。

横貫委員

あると思います。あるのはあると思います。

佐久間部会長

あってもいいということですか。

横貫委員

あった方がいいと思いますね。

佐久間部会長

あった方がいいということですか。

横貫委員

あるべきじゃないかと思います。

佐久間部会長

あるべきということですね。

今お話を頂きましたけど、あるということでご覧になっていて、この辺にあるだろうとか例えばみたいな話をもう少し思い出していただければと思いますが。

横貫委員

私の子どものことになりましたが、話さなくなりましたね。話させようと思いましたが、でも話さなくなったことを見て、親としては成長したなと思いました。僕もそうでしたが、こういう段階だと。上の子はすごく話をしていました。中学校になってもかあちゃんかあちゃんと言っていたんで。その時僕が不用意にマザコンかと言ってしまったら、一気に話さなくなっていました。家庭と違うことをするなと思いましたので。どれが合っているかは分かりませんが、経験で言うのですが。

佐久間部会長

もう少し突っ込んでいいですか。小学校と中学校なんですか。それとも例え

ば何歳とかいつ頃とか。いくつかの節目がありますよね。子どもの成長というのは。今日は小学校と中学校がクローズアップされていますが。

横貫委員

私の子どもの場合は息子は小学校5年6年で一気に変わったのと、娘は中学ですね。高校になって、また変わったなと思いました。

佐久間部会長

小学校でいうと5年6年、高学年になるタイミングと、中学生になるタイミングと高校生になるタイミングと。

今日も後になるにつれ具体的な話をよろしく願いいたします。

横貫委員

分かりました。

佐久間部会長

はい、ありがとうございます。

では、小林委員、引き続きお願いいたします。

小林委員

こんにちは、小林です。

中一ギャップですね。何を話していいか分かりませんが、私自身は小学校から中学校に上がるのはすごく不安でした。いろいろな情報が入ってくるので中学校は怖い所だと思っていたので、すごく不安でした。子どもの話になるのですが、長男は何もかもそういう情報は入ってこない子どもだったので、逆にその中学に行くのが楽しみでわくわくしていたことを覚えています。真ん中の子どもは兄からいろいろと聞くので、心配なところと小学校の時に少しいじわるをされたことがあったので、早く中学校に行きたいなというのもあって、いろいろな感情が入り乱れていて不安なところと、希望を持っているところがあったのかなど、3番目の子どもは上2人から聞く話とその時、その時の中学校の問題が絡んできて、ちょっと空いている時期だったんで、外に行きたくない。もう公立の学校は行きたくないんで、私立に行きたいと言いました。その子どもによっていろいろなギャップを持つと思うんですが、不安であったりとか、期待であったりとか、何というかギャップってあってもいいですよね。その中で越えていくものもあって乗り越えていくものもあって、それも1つの経験だと思いますので、正直何がギャップなんでしょうか。ちょっとよく分からない

んですけれど。いろいろな面でギャップはあると思います。

佐久間部会長

ありがとうございます。

一通りご意見をいただいたので、しばらくは相互に意見交換をしていただきたいなと思います。何がギャップかということをお林委員のご指摘で言えば、データで言えばですが、おっしゃったようにイジメは約3倍なるとか、不登校の子どもも約3倍になるとか、暴力行為もやはり3倍以上と小学校6年生と中学校1年生では、そういう子どもの状況がおおむね3倍程度になってしまうというのが中1ギャップと言われているのですけれども、その辺も含めて小中のギャップについてもう少しお話いただきたいなと思うのですが、ギャップはあっていいのではないかというご意見が市民委員から何回か出されましたが、その辺は学校のお立場ではいかがですか。

国吉副部会長

私から説明します。確かにある程度の段差、ギャップはあるのはいいと思います。例えば階段で言いますと、緩い階段、段差のある階段があります。緩い階段でしたら、すべての子どもが上がれるんですね。ところが少し高くなるとやっぱりある程度能力があって柔軟性のある子は上がれると思いますが、そうじゃない子どもは上がれないです。そういうところを最近教育現場の中でだと思ってしまうのですが、やっぱりそういう段差が高いのであれば、少しでも緩和する方向がないだろうかということで、こういう問題がクローズアップされてきたのではないかと私は思います。

佐久間部会長

齋藤委員は何かありませんか。

齋藤委員

はい、おっしゃるとおりだと思いますが、段差を乗り越えられる子どももちろんいるのですけれど、なかなか乗り越えられない子どもというのが増えてきたのではないかなという気もします。

確かにそういう機会に、段差を超えるような力も今後の社会で生きていく上では、必要になってくるのですが、その段差は少しでも柔らかく緩やかにして多く子どもがその段差を乗り越えられるようにするところが必要になってくると思います。

佐久間部会長

そのあたりいかがですか。

拝聴していると横貫委員と小林委員の温度差が少しあるというか、横貫委員の方が段差があってもいいということが割と強く出されている感じがするのですが、今緩やかな方がいいという学校側の意見ですが。

横貫委員

学校現場はよく分からないのですが、最初は緩やかなものから、社会に出たらもの凄い段差があるので、それを乗り越えるような最初のステップがいいのだと思います。ギャップという意味ではそうなんですけど、何もないっていうのが、子どものために全部それを合わせてスムーズにいつてくるというのが、すごく怖いなというのも思います。

逆境とか好きで困難とかあればあるほど燃えてくる方なんで、何もないのは何もないのかと思ってしまいます。

佐久間部会長

前はさみを持った瞬間に、責任感が生まれると言ってくさいましたが、そういうのも一つのギャップですよ。

横貫委員

そうですね。

佐久間部会長

小林委員は学校側の緩やかな段差にしたほうがいいのかという意見についてはどうですか。

小林委員

そうですね。緩やかであってほしいなとは思っています。

全くギャップがないというのではなくて、ある程度のギャップはあっても仕方がないので、できれば緩やかな方がいいかなと思うのですが。

佐久間部会長

ありがとうございます。

あとの議論に影響するのでもう少し。今、学校側からは学校の中での感じるギャップ、特に学級担任制と教科担任制が一番大きいのではないかというお話もありますが、その辺りで実際には子どもやご自身も含めて学級担任と中学の

教科担任は随分ギャップがあるものですか。

小林委員

あります。小学校の時は担任の先生がすべて教えてくれていて、中学校に入ったら各教科の先生がいて、結構そっちの方が良かったような気がします。子どもたちは得るものが大きかったと思います。

特に下の子は中高一貫の学校に行ったので、中学校の先生と高校のときの先生にどちらも教えてもらえるのですよね。中学校の時は分野によっては高校の先生が来て教えてくれたりとか、高校へ上がっても中学校で習ったことの補足みたいなことを教えてほしい時は中学校の時に教えてもらった先生に聞きに行くとか、そういうメリットがあったので、各教科の先生というのは子どもは好きでした。だから小学校から中学校に上がると時にそのギャップは大きいと思います。

佐久間部会長

先程の議論からさらに突っ込んで申しわけないんですが、教科担任制がいいというのは小学校でも教科担任制がいいということではないですか。

小林委員

小学校でもあったらいいかなと思います。

佐久間部会長

何年生ぐらいから。

小林委員

それだったら小学校に上がる時から。

佐久間部会長

小学校1年生からですか。

小林委員

あってもいいのじゃないかと思います。

いろんな先生と交流ができるので。担任の先生だけが駄目っていうんじゃないんですけど、いろんな先生との交流が持てるので、いいんじゃないかなと私は思うんですけど。

佐久間部会長

必ずしも教科担任制というか、いろいろな先生と交流ができるというのがメリットということですか。

小林委員

はい、それがメリットかなと思います。

佐久間部会長

分かりました。

今の辺りのご意見で横貫委員からもう少し何か思われることがあったら、お願いします。

横貫委員

教科担任制は面白いですね。教科担任というとなつぱりその教科のスペシャリストなので、学力は上がるとまず思いますし、学級担任になったらとても大変になると思います。やっぱりいろんなことをしないといけないので。私も学校の中がどうなっているのかシステムがよく分からないですが、ただスペシャリストに教えてもらっている方がいいように思いますし、1年生からいろんな先生と絡み合うというのもいいと思います。みんながみんな教科ではなく、学級だと思いつながら教科をやればいいのかとも思います。

美容師をやっているんで、自分が担当していても他のアシスタントが入ったら自分が担当だと思つてやりやと言つているので、結局同じことだと思つます。責任と言う意味では、同じ責任を持つて接すると考えれば、同じだと思つます。教科とメインと考えると、どこかでメインを持つてやつていつて、言つてることが違つても子どもは困惑するかもしれませんが、それも面白いと思つます。

佐久間部会長

市民委員の意見としては、小学校1年から教科担任制にしてもいいという、聞いたことのないような極端な意見が出てきていますけど、学校側のコメントはいかがですか。

国吉副部会長

今市民委員の方から話ありましたが、小学校1年生からいろんな先生がかかわる方がいいんじゃないか。それもいい部分はあるかと思うのです。でも現在小学校勤務していつまして、1、2年生の担任はといつますとやはり1人の先生が細かく見ていつるといつのが一番大事な時期だと思つます。よく保護者の方か

らいろんな問い合わせがきます。それに答えるためには例えば教科しか見ていなかったということになりますね。見れない部分があるんです。ところが1人ですべての時間見ていますと、この時はこうだった、休み時間はこうだ、あるいは終わりの時間はどうだった、こういうところがすべて全部入った上で、保護者にお答えすることができるのです。その質問の問いに答えることができるのです。だからそういうことを考えたならば、先ほどいろんな人とという話もありましたけれども、私は一人の先生が細かく丁寧に見ていく方がいいのではないかと思います。保護者にも何人か聞きますと、やはり担任の先生がしっかり見てくれているということがこちらにもよく入ってきますので、そういったところが教科担任制を取りますと多分これは不可能だと思います。以上です。

佐久間部会長

今のご意見についてはどうですか。

小林委員

下の子どもは中高一貫に行ったのですが、担任の先生はちゃんといているのです。他の教科の先生から教科の授業の内容であったりとかは担任の先生に入るようになっていて、担任の先生がちゃんと把握しているというのはあったので、小学校の場合はどうなのでしょう。経験がないから分からないんですけど、いけそうな気もするのですが。

各教科の先生と担任の先生が連携さえ取っていけば不可能じゃないと思うのですけど。

佐久間部会長

横貫委員どうですか。

横貫委員

何とも言えないですね。

どっちも思います。やってから決めてもいいんじゃないかなとも思います。

佐久間部会長

今、小と中のギャップの話をしてますけれども、幼児教育から小学校に入ってくる時の子どもは相当不安定なところがあって、今日は話題にはなりませんでしたが、小1プロブレムというのが起こっていて、そこではやっぱり今、国吉委員がおっしゃったようなじっくりと温かく見守るということも一方では大切だと言われていて、なかなかその辺はまた今後資料等見ながら議論できれば

なと思います。齋藤委員は付け加えておくことはありますか。今の流れで言うと、小学校からの教科担任も1年生からでいいんじゃないかというのがご意見ですが。

齋藤委員

確かに担任の先生と教科担任の先生の連携ができていれば、そういったところもクリアされるのかもしれませんが。しかし、やはり小学校1年生の時は担任の先生が1人の子どもを丁寧に細かく見るということが大事かなと思います。例えば1時間目の国語の時間に見せる子どもの表情と、昼からの体育で見せる表情は同じ子どもでも違うと思います。それを見ることができるのはやはり小学校では学級担任だからという部分が大きいかなと思います。そういった部分で先ほど幼児教育からというお話がありましたけれども、そこからの接続で言うと小学校の低学年の内は一人の先生がじっくり丁寧に見ることの方が大切かなと思います。

佐久間部会長

ありがとうございます。

今議論がちょうど2番目のところにもかかわって、小から中へ円滑に接続していくという話で、例えば学級担任か教科担任か、あるいは教科担任なら何年生からしたほうがいいとか、あるいは学級担任との連携のあり方というところもお話をいただいています。2番目の議題にそろそろ入りたいなと思っているのですが、小中の円滑な接続のために重要なことは何かというのが2つ目の議題になっているのですね。

おそらくここで言うところの小中の円滑な接続というのは、今のところ小学校の高学年から中学校1年生というあたりをイメージしているのだなと思うのですが、その部分でももちろん構いませんし、今の話で言えばもう少し時期を広げて考えてもいいのかという気もしますし、さらに全体会での教育委員会事務局の話で言えば義務教育学校とかというような枠組みの紹介もありましたので、どこからでも結構ですので、小中の円滑な接続のため重要なことについてご意見を伺えればなと思っています。

急ぎませんが、順番は同じ順番で準備ができ次第、お話をいただければと思っています。はい、よろしく願いいたします。

国吉副部会長

今思いついた点をいくつか申し上げたいと思います。

大きな違いの中で先ほど申し上げましたテストの違いであります。繰り返し

ますと小学校は単元をそれぞれ確認しているようなテストが多いのに対して中学は範囲も広がります。中間、期末、実力もそうです。そういったところです。受け方がかなり違うと思うのですね。極端な話ですが、例えば6年生の最後のある時期に中学校と同じような形式でまとめのテストを実施するというのも1つの手ではないかと思います。私はテストの受け方について小学校と中学校で大きな違いがあると思いました。例えば中学校はものすごく厳格です。テストの配布、回収、テスト中にしても例えばテストは担任が配りますけれども数はしっかり数えて、各列ごとに配ります。回答用紙もあります。当然私語はだめです。もし消しゴムや鉛筆などを落としますと、静かに手を挙げてその場で子どもは待ちます。監督の先生は傍まで行って声をかけ、それを拾ってあげます。という形のテストです。テストが終わりました。回収はこれも後ろからずっと集めまして、前で担任が確認する。順番も出席番号1番からずっと並んで最後までという状況です。これが中学校のテストです。ところが小学校の場合、私がびっくりしたのが1列になってないのですね。そういう学級の形式もありますけれども、見たら机が全部横を向いているんです。それはその学級の特徴かもしれないのですけれども、そういった学級がいくつもあったので、違うんだと私は思いました。

1個ずつ向いているような形で、前に一列に向いているような状況じゃないんですね。質問がある場合も声を出しますし、消しゴム、鉛筆を落としても子どもが勝手に拾うという状況もあります。またごみが出てきたら前までごみを捨てにいくという状況等もありますね。その辺は私が小学校でギャップを感じました。中学校と違う部分に関して、こういったところは、今先ほど言いましたけども例えば6年生のある時期にこういうテストを受けるんだよ、中学校ではこうなんだよという機会があってもいいかなと思います。

それから当然子どもたちが中学校に進学して違うのは、クラブもあります。クラブもかなり厳しいと思います。今までの小学校でやっていたクラブはこれはいいか悪いかは分かりませんが、遊び的な感覚があるのが小学校のクラブだと思います。それに対しまして、中学校は規律も厳しいです。時間も厳しいです。土日の活動も最近はやり過ぎだということがあって時間を切る部分もありますが、そういったところも厳しく指導されます。そういったところが例えばサッカーが好きで小学校にいたのだけでも、中学校にいったらサッカーをしたが、自分が思っているサッカーとは違う、かなり厳しさを感じ、挫折を感じるというのもあるかと思います。

また戻りますけどもテストです。よく言われるのが私もともと中学校の教師でしたので、1学期の終わりに懇談をします。当然テストの成績を見ながら懇談をするわけなので、よく言われるのが小学校のときはよくできた

んですよ、国語も算数というような形で、ところが中学に入ったら、うちの子どもこんなんですかというふうに言われます。この辺も子どもにとっても親にとっても大きな戸惑い、ショックを受ける部分ではないかと思います。他にまた思い出しましたら出していきますが、とりあえずクラブとテストについて言わしてもらいました。以上です。

佐久間部会長

ありがとうございます。

齋藤委員もクラブとかのことも含めて違いをご指摘いただきましたけれど、合わせてというか続いてお願いできますでしょうか。

齋藤委員

小中ギャップの段差を緩やかにするために、中学校でやっているようなことをそのまま取り入れるのではなくて、小学校で少しでも慣れるではないですけど、近いような形で小学校での教育活動の中に取り入れていくことも必要かなと思います。本校では6年生において教科の学習の中で家庭科と図工は担任外の先生が担当しています。ですので担任ではありません。2クラスですが、社会と理科の授業では6年担当が交換して授業を行っています。体育と音楽は学年合同ですること多いです。算数は少人数加配の担当の先生が受け持ったりしています。実際担任だけが授業を持つというのは国語と道徳位かなと思います。そういった部分ではさきほどの話の中の教科担任制という部分も少し意識したような形で、特に高学年では取り入れている学年が多いのではないかなと思います。

あともう一点ですが本校の中学校区のはすはな中学校区でも、小中一貫教育ということで先生たちの連携を進めているところです。27年度めざす子ども像をもう一度、一から見直すということではすはな中学校、古川橋小学校、門真みらい小学校の先生が集まって、子どもの実態を話し合う中で、めざす子ども像を策定して9年間で子どもを育てていこうという意思統一を図ったところです。例えば6年生の担任が、6年間の中の6年目と考えるのではなく、9年間の中の6年目と考えると、子どもの指導が全然異なってくるのかなと思います。その辺の教職員の意識、9年間を見通したという意識も重要かなというに思います。

佐久間部会長

はい、ありがとうございます。

今、学校のお2人の委員からとりわけ国吉委員から厳しきみたいなこととか

厳格さみたいなこととかが随分と小学校と中学校で違うということの指摘とか、それから齋藤委員からは実は小学校で既に教科担任制に類するようなことをもう実施していたり、あるいは中学校区で子どもを育て上げていくんだという認識で話し合いを持っているということもありました。どのところでも構いませんのでご意見があったら、順番に、横貫委員からお願いいたします。

横貫委員

小中の違いがもう1個分かりました。小学校は鉛筆です。中学校はシャーペンです。クラブはいいですね。小学校で外のクラブとかもいろいろやっていたりとかして、それが中学校に入って先輩後輩とか規律とか秩序とかそんなことでやられて辞める子どもも多いみたいで。

やっているんですね。教科担任制みたいなことを。

齋藤委員

やっています。

横貫委員

でも、ギャップがでるということなんですね。

5年生6年生ぐらいでちょっとアクションを起こすのも面白いかもしれませんね。厳しさ的なものをもう少しやるというのが、ありなのかもと思います。

佐久間部会長

もっとお伺いしますが、厳しさみないなものの違いを国吉委員がおっしゃったんですが、厳しさみたいなのは前倒したほうがいいですか。極端な言い方で言っていますが、小学校でも経験をさせたらなという意見もでていたので。

横貫委員

どうなのでしょう。今の規律的なことで小中の違いを思い出しました。小学校はカラーリングをしている子どももいますよね。中学校はいないんです。

佐久間部会長

校則ということですね。

横貫委員

校則が厳しいということですね。でもこれ大変ですね。厳しさみたいなものは前倒ししても面白いんじゃないですか。5年生6年生から入れてしまっ

も、ただ4年から5年という差で今度は何かがおこるかなとは思いますが、結局下に落ちるだけであって、子どもたちの思考がどう変わるのか、ついていくのかというところはよく分からないと思いますが、前倒しするのは面白いかもしれませんね。

佐久間部会長

校則のご意見がありましたけれど、何か思うところはありませんか。今、頭髪の色という分かりやすい話がありました。

国吉副部会長

前回は触れたかと思うのですが、中学校は次に高校というものを見据えています。中学校は3年間ですから卒業したら高等学校進学ということで。それに向けて特に頭髪については厳しいです。茶髪等で入試に行きますとかなり厳しい状況でその合否が返ってきます。そういったところから中学1年生の入った時から、そういった面では厳しく指導されますし、当然服装もそうです。服装の乱れはというところで中学校の先生は言われますので、生徒指導面ではかなり厳しくしているかと思えますね。

佐久間部会長

髪の毛の色は個人の自由だとか親に言っていたりとかは、どんな感じですか。

齋藤委員

そうですね。髪の毛の色は小学校で強くは言っていないです。指導はしてないですね。ただもう少しで中学校やでという声掛けはすることがあるかなって思います。

佐久間部会長

ありがとうございます。ちょっと今の話とはそれるかもしれませんが今のご意見どうですか。専門家として。例えば小学校では強くは言っていないけれども、そろそろ中学校だから黒にした方が良くないんじゃないかという、中学校は高校とか社会に出る、それに向けてきっちりしないといけないからきっちりしているとおっしゃっていますが。

横貫委員

個人的な意見ですが、小学生でもあまりカラーリングをするのはあまり好きではないんです。私のお客さんでは小学校のお子さんが来て、カラーリン

グをしてくれというのはほとんどないです。小学生でカラーリングをしているお子さんというのはお母さんがやった余りを塗っているという子どもが多いというのはすごく聞きますね。ですから保護者のモラルの問題かなと思うんですけども。ただ中学校に入って校則がしっかりあるのは、私はそれは賛成だと思うんで、ただその中でどうやるかってことを考えた方が。私はそのタイプだったので、ということだと思います。

佐久間部会長

ありがとうございました。

小林委員には少し話を戻して、中学校には一定の厳しさみたいなものがあって、小学校と差があるのだということを国吉委員がおっしゃって、それから齋藤委員は教科担任制ではないけれども、授業を教科によって交換しながら、中学とよく似たことも小学校の高学年でも既にやっているんだというご意見をいただいて、そのあとを受けてということなんです。

小林委員

下の子どもは小学校5年生6年生の時に、そういう経験をしています。だから結構勉強になったということを知っていました。それもあって中学校に上がって、教科担任の先生が一杯いるということで、いろんな面で学習ができるのは楽しみかなというのが、中学校に上がる前に言っていました。でももう既に5年生6年生で担任の先生だけではなくて教科の先生から教えてもらうという経験は、もう5年生6年生でしているんで、それはプラスになっていると思います。ただ上の子ども2人はまだそういうのは小学校では経験しなかったんで、ギャップは持っていましたけど、下の子どもではそういう経験をしているので問題はなかったかなと思うのです。逆に良かったのじゃないかなと思います。

佐久間部会長

ギャップが下の子どもの場合にはなかった？

小林委員

はい、少し緩和されましたね。

佐久間部会長

慣れるのですかね。

小林委員

結構楽しみにはしていました。中学校になったら先生が全部違うんだということを上から聞いているから、余計に自分の中で想像が膨らんで一杯先生がいてるので、一杯先生に触れ合えるんだということが強くて、余計にギャップはなくなったように思います。

佐久間部会長

ありがとうございます。

もう少しだけ議論を続けたいなと思っていますが、国吉委員も後で思い出したら他の観点でとおっしゃっていましたが、テスト、それからクラブ、それから評価という成績をつけたりするあたりも国吉委員から話がでていて、齋藤委員からは小学校での交換授業のこととかも出ていて、他に小中の円滑な接続のため重要なことということで、もう少し議論しておきたいなと思っていますが、少し考えていただいて、あるいは少し聞いてみたようなことがあればいかがでしょうか。

小林委員

小学校6年生の子どもが中学校に訪問するっていうのはやっているのですよね。

国吉副部会長

やっています。

小林委員

卒業する前に6年生の子どもが自分の行く中学校に見学に行くっていうのは連携しているのですよ。それをずっとしているんだったらもうちょっと機会を増やしたら、もっといいのじゃないかなと思います。1回だけの見学だったので、例えばクラブを見せてもらうとか、他の授業を見せてもらうとか中学生たちと交流できる機会がもう少しあったら、もっと円滑になるんじゃないかなと思うんですけど、難しいですか。

齋藤委員

中学校見学というのはどこの中学校もしていて、本校の中学校校区では12月に昼からですけど学校見学に行きました。中学1年生の先輩から学校生活の話を聞いた後に、クラブ体験をするという活動を行っています。行かせてもらう学校によれば授業に入るところもあるかもしれません。回数的な部分では確かに1回だけなので、もう少しあったらいいかなというふうに思いますが、なか

なか難しい部分もあります。

佐久間部会長

はい、国吉委員お願いします。

国吉副部会長

本校も1日だけなのですけれども、日中見学という形をとっております。中身を言いますと、もともと希望しているクラブを体験するというようなところが主旨でやっております。確かにそれが2日3日は取ってくれたらありがたいという気持ちは分かるのですよね。なかなか取れないのが学校現場の実情かと思えます。

佐久間部会長

他の観点でも意見がありましたらお願いします。

国吉副部会長

学校のシステム上で取っているものだと思うのですが、我々はいきいきというふうな言い方をしています。どういうものかといいますと中学校の先生が小学校に、小学校の先生が中学校にという形で相互で入れ替えるんですね。小学校の先生が中学校にいきますと。例えば中一の数学の授業にT・Tで入ったり、中学校から小学校にいきますと6年生の算数の授業に逆にT・Tで入ったりというようなところをスムーズにつながるような形の取り組みはすべてではないのですけれども、やっております。以上です。

佐久間部会長

1年間ですか。1年間完全に入れ替わってということですか。

国吉副部会長

1年間です。

佐久間部会長

私から横貫委員にもう少し教えてほしいのですが、職場体験学習で小学校からもきて、中学校からもきているのですか。

横貫委員

小学校からは来ていません。

佐久間部会長

小学校からは来ていないんですね。

では、その辺の話をもしご意見があればお願いします。

横貫委員

この前終わったばかりなのですが、中学2年生が来ましたが、それなりに終わりました。でもだんだん元気がなくなってきましたね。始めたのが6年か7年前ぐらい前になりますが、年々元気がなくなってきましたね。あいさつとか返事とかという問題ではなくて、もっとキャッキヤ、キャッキヤしてもいいと思うのに、何かやったらおとなしい感じがするのが、つまらないです。が、終わってからSNS見たら炎上していますね。ちゃんとチェックします。がんがんそっちでは盛り上がっているんで、表に出て来て欲しいと思います。

小学生はそれはあまりないんじゃないですか。SNSでああだこうだというのは、まだそこまでいってないんじゃないでしょうか。中学生だけですかね。

国吉副部会長

でも一部はそこにはいつているんじゃないですかね。我々が知らない話だけの気もします。

佐久間部会長

総合学習の中で小学生も少しは職場体験をしていますよね。やる時もあるという感じですか。中学生みたいに制度的にはやっていないと思いますが。

国吉副部会長

そうですね。

佐久間部会長

ありがとうございます。もう少しご意見あればまだ伺いますが、なければ次の議題に。次の議題も含めてずっと話をさせていただいたところもあるんですが、話をまとめていくためにというところで、次の議題を見てもみましようか。

思春期の入り口となる5年生以降の教育内容や形態について、どのような形が望ましいか。極めて具体的ですので、考えて下さい。5年生以降の教育内容や形態についてどのような形が望ましいか。ですから、しばらく考えて下さい。

では、国吉委員お願いします。

国吉副部会長

先ほどの話題で低学年は学級担任制が相応しいだろうと言いました。ではいつの年代までその方がいいのかといいますと、個人的な見解でありますけれども小学校の1年生から4年生ぐらいまでかなと思います。

では5、6年生はどうなのかということですが、中学校との段差をやっぱり低くするためにもすべての教科を変えることは無理なのですが、いくつかの教科について教科担任制を引いていくことも必要なのではないかと思います。それが強いては中学が入った時に、すべて教科で先生が変わるということにも柔軟に対応できる1つの材料になるんじゃないかなと思います。以上です。

佐久間部会長

ありがとうございます。教科担任についてということで今お話をいただきました。その話を続けてでも結構ですし、それ以外の観点でも結構ですので、齋藤委員いかがでしょうか。

齋藤委員

先ほどいきいきスクールの話があったのですが、本校ではまだできてないですけど、小学校の先生と中学校の先生が相互に行き来し合うということは、それぞれの教師にとって、教科指導のスキルを上げることに繋がりますし、逆に子どもたちから見ると、小学校の時に中学校から来てくれた先生が中学校にいる、反対に中学校に進学した時に小学校でお世話になった先生がいるということは、精神的な安定というか不安の解消の1つにも繋がるかなと思います。子どもの立場から見ても、教員の側から見てもいきいきを、小学校6年生ぐらいからもっと取り入れていくのもひとつと方法かなと思います。

佐久間部会長

中学校の先生が小学校5、6年生の担任なり、指導教科もするのか、今、完全に入れかわる話なのか、中学から出前で授業をする話なのですか。

齋藤委員

出前的なところで、週1日1時間とかいうぐらいのペースでまずはいいのかなと思います。

佐久間部会長

それは中学校の先生はできるんですか。時間的に大変ですか。うまく調整すればいけるとか。

国吉副部長

そうですね、教科によっては余裕のある教科もありますんで、その教科と小学校のニーズがあえば動かすことは可能だと思います。

佐久間部長

もう少し突っ込んで聞きますが、中学の先生が小学校の授業を聞きに来たら、そんなに面白くなかったとかそのことはないものですか。むしろ小学校の方が詳しくて面白いとか。

齋藤委員

子どもたちにとってということですか。

佐久間部長

はい。

齋藤委員

中学はより専門的な分野になるので、子どもたちにとっては知的好奇心をかき立ててくれるような部分はあるかなと思います。

佐久間部長

いきいきスクールは先ほどの一年間先生が入れ替わるのと別の制度ですか。

国吉副部長

いきいきスクールとは別で、いきいきスクールは週 1 回ぐらい 2 時間ぐらい入れ替わるものです。

佐久間部長

両方ともやってるということですか。

国吉副部長

後者をしています。

佐久間部長

週に 2 時間ぐらい替わるものですね。

では、話し戻しますが、今の話についてでも、それ以外でも構いませんので、

5年生以降の教育内容や形態についてどのような形が望ましいかについていかがですか。横貫委員お願いします。

横貫委員

先ほどのいきいきスクールは先生が替わるのですね。

齋藤委員

そうです。

横貫委員

子どもが動いたら面白いですよ。

中学に行くのに先生が行くんじゃないで、子どもが行った方が良くないですか。だいたいなぜ教える人が動くんですか。教えてもらう人が動かないと。

佐久間部会長

小林委員の意見と一緒にするとそうなりますね。

小林委員

学校見学です。

横貫委員

そうなりますね。それも一緒に交えてすればいいんじゃないですか。

国吉副部会長

学校がすぐ隣ならできますが、移動がありますので、事故にあったらとかを心配します。

横貫委員

まあ、それもありますけど。でも教えられる側がいくべきですよ。以上です。

佐久間部会長

では、小林委員お願いします。

小林委員

一緒です。面白いと思います。

いろんな形で経験できるというのが子どもにとっても一番プラスになるんで、規制にはめてしまうんじゃなくて、いろんな形、方法でこんなこともあるというのを教えることができれば、すごく伸びると思います。学校に行ったら学校の勉強しかできない、クラブもこのクラブしかできないというんじゃなくて、その中でいろんな分野で経験できるとなったら子どもはすごく伸びるんですよ。だからそういう意味で小中一貫があってもおもしろいかなと私は思うんですけど、難しいですかね。

佐久間部会長

今、小林委員がおっしゃっていたことを皆さんにご意見を一回伺いたいなと思っていることがあって、そもそもの事務局の提案が、小中一貫教育の推進ということでした。今近くにあったらいいのになというのが国吉委員からもありましたけれども、事務局のプレゼンテーションで言えば、義務教育学校施設一体型とかですね。資料のここです。義務教育学校施設一体型、同じく施設離型とか、併設型小中学校とか5つあって、それから先ほど齋藤委員からご説明があったのは右の中学校区一貫教育推進協議会、これですね。というのも今やっておられるということで、特にこの左の下のコマですね。義務教育学校施設一体型とか、この辺で何かご質問とかご興味のあることとかご意見とかあれば、ぜひ市民の委員の方からお話を伺いたいと思います。何か分かりにくいことはないですか。もう大丈夫ですか。

小林委員

この施設一体型というのは。

佐久間部会長

義務教育学校というのは1年生から9年生まで、小中の区別をつけないということですね。それで施設一体型というのは簡単に言えば、同じ建物中で過ごしている1年1組から9年1組までであることですね。それから施設分離型は今ある施設を利用して校長先生を例えば一人とかで、学校名も一緒に施設はたまたま今ある小学校、中学校を使っているけれども、1年生から9年生まで義務教育学校だとかいうケースが全国にはありますね。併設型小中学校とか連携型小中学校というのにつれて今の小学校、中学校に分かれている学校にだんだん近づいていきます。そのあたりで何かありませんか。

小林委員

施設分離型は併設していればできますが、小学校と中学校が離れてる場合は難しいですね。

佐久間部会長

そうです。

小林委員

それじゃ施設一体型にしようと思えば、建替えがあつたりとかしないといけないんですが、今の段階でそれも難しいですね。

佐久間部会長

それは分かりませんが、思い切ってするかもしれません。

小林委員

思い切ってされるのであれば、施設一体型の方がいいかなと思います。

佐久間部会長

興味深いですか。

小林委員

興味深いですね。離れる部分がやっぱり出てくると思うんで、一体型にすればその辺の解消もされなくなると思います。私は施設一体型の方が連携も取りやすいし、いいかなとは思うんですけども、難しくないですか。門真市はどうなんでしょうか。

佐久間部会長

いやそれは、ご意見が近ければそうなるかもしれません。

小林委員

そうですか。では一体型にできるように頑張ってください。

佐久間部会長

あともう一つ、施設が一体型から隣同士であるとかいうご意見だと思うんですけども、それと別に義務教育学校として、もう小中の区別をなくしてしまおうというのと、一応小中は残すけれども、施設は同じところというのと、この書き方で言えば一番目と3番目の違いなのですが。

小林委員

どちらがいいかは悩めますが、急に9年間一緒にしてしまおうというのはしんどいかなと思いますし、それなら最初から一つにした方がいいのかなとも思いますし、でも思春期の子どももいるので、そういう意味では少し離れた方がいいと思いますし、どうなんでしょうか。思春期の子どもと小学校低学、年長が一つ屋根の下というのは難しいのでしょうか、どうなのでしょう。

国吉副部長

ちょっと答えにはならないと思うのですが、実際に例えば守口市でも土居駅のすぐ近くにさつき学園という小中一貫校ができました。それ以外にも今までいくつも全国的にできてきているということは、今小林委員が心配しておられる懸念材料はそれほどないのではないかという感じはします。

事務局（三村学校教育課長）

すいません、せっかく一番活発になってきたところで本当に申しわけないのですが、時間が残り10分程度なってきましたので、申し訳ありませんが、部会の意見をまとめていただければ助かります。

佐久間部長

しかし最後に横貫委員の話も聞きたいので、今の話はいかがですか。この義務教育学校一体型とこの併設型小中学校について何かご意見は。

横貫委員

施設一体型にした方が多分先生たちが助かるんじゃないでしょうか。それが一番じゃないですか。

見れるところにいるというのを考えれば、分離型になるとあっちもこっちもいかなければならないので、それこそ大変だと思うんで一体型の方がいいようには思います。

佐久間部長

でも段差はあった方が良くないと思いますか。

横貫委員

あった方が良くないと思います。

一体型にしたほうが、7歳と15歳の子どもがいて、倍違う子どもがいるとい

うことですよね。面白いと思います。

佐久間部会長

だから校舎を分けるとかもあると思いますが。

横貫委員

男便所は高さは変わるのですか。

国吉副部会長

そうですね。違います。

佐久間部会長

あと国吉副部会長がおっしゃっていた4年生ぐらいを小学校としている国もあるんですね。ドイツなどがそうなんです、5年生ぐらいから中学になったりとか。だから今は6年生までは小学校、その後3年間は中学校の分け方を変えるということもありますよ。どうですか。今6、3ですけど、4、4、1でもいいですし、4、3、2でもいいですし、どう思われます。

小林委員

施設一体型にした方が、その辺の問題も解消されますし、臨機応変にできるので。

佐久間部会長

横貫委員は最後にいかがですか。

横貫委員

8、1なら大変になりますね。ずーっと遊んでいて最後の年は受験勉強ばかりになってしまいます。その辺は考えていけばいいんじゃないですか。

佐久間部会長

併設型だけではなくて、いろいろところで議論をやっているので、今後門真でも考えていければいいなと思います。

一旦事務局から提案もありましたので、今、現実的に小学校の高学年と中学校の接続のギャップみたいところが今日のメインテーマでしたから、そのあたりでおおむね共通しているような話でまとめていけたらなというふうに思います。前提となっているのは議論の流れでいえば、おおむね学級担任制と教

科担任制のあり方とか。それからそのあたりをめぐって、既に小中で交換とかそれから連携とか、あるいは小学校の中でも少し教科担任的なことを試しているとかという状況の紹介とかもしていただきつつ、しかし一定段差があった方がいいという意見もありながら、段差があるならば少し低くした方が、すべての子どもが乗り越えやすい段差になるのだろうということで議論が進んでいたように思います。

結論とまではいきませんが、途中で出ていましたように小学校の低学年、4年生までなると思うのですが、そのあたりは主に担任が丁寧に子どもものことを見ていく、今日の議論でいうと5年生のあたりで少し教科担任制あるいは中学の先生が出前できたり、小学校の児童が中学校に行ったりという意見もありましたけども、いずれにしても学習内容、形態で中学校の経験を進めていけばいいんじゃないかというようなことで、連携がすすめばなという話が出ていました。

最後には、できるならば施設一体型の学校なんかでもできてもいいのではないかとのご意見もいただいたところです。

これぐらいでまとめておこうかなと思うのですが、大体共通していますか。よろしいですか。ではこのような内容で後ほど報告をしたいと思います。では事務局お願いします。

事務局（三村学校教育課長）

ほんとにありがとうございました。皆さん活発に議論をしていただいてその意見につきましては、その概要としてこの後の全体会で佐久間部会長より報告をしていただきます。審議会委員全員で共有させていただきたいと思います。

現在4時で、4時10分からなので全体会開始まで10分程度休憩をはさみません。本当にたくさんのご意見ありがとうございました。